

アフリカの人々と名付け 34

擬似子称と妊婦の「^{つわり}悪阻」現象

小馬 徹

擬似子称と「家財産制」

西南ケニアのキブシギス社会では、出産を待つまでもなく、婚入した若妻にすぐに「擬似子称」が与えられる。それは、彼女が産むだろう赤ん坊へ「再来」する事が期待されている夫の祖先Aに因んだ、「Aの母」という名前である。この事實は、アフリカでも多くの父系の民族とは異なっている。

キブシギスのこのような擬似子称は、社会における女性の地位の「構造的な高さ」による、と前回述べた。女性のこうした位置の背景にある制度を、グラックマンは「家財産制」(house property system)、または「家財産複合」(house property complex)と呼んだ [M. Gluckman, "Kinship and marriage among the lozi and the Zulu of Natal", in A. R. Radcliffe-Brown and Daril Forde (eds.) *African System of Kinship and Marriage*, 1950]。ここで家 (house) と呼ばれているのは、一夫多妻家族における妻単位の家である——キブシギスでは前者を *kap-chi*、後者を *kop-chi* と呼んで明確に区分する。この制度では、それぞれの息子の数に関わりなく、「家」が夫の遺産を等分する。また、各「家」の息子たちは、婚出した同母姉妹に対して婚資として支払われた家畜を、自分たち自身の結婚に必要な婚資として排他的に用いる権利を持っている。

この制度は、女性の交換としての結婚における男女の二者択一的な役割、つまり交換の主体としての男性と客体としての女性という役割の峻別を緩和する側面を持つと言えよう。それは、結婚という制度が女性に課す家内的存在という限定性から幾分なりとも女性を開

放し、公的な存在という彩りを与える事にもなる。それゆえに、エバンズ=プリチャードは、スーダンのヌエル人について、こうした制度では「父系の原則は、ある種の逆説によって、母親を通して辿られることになる」と述べた [E. E. Evans-Pritchard, *Kinship and Marriage among the Nuer*, 1951]。

私はそれを、こうした問題をキブシギスの事例に則して詳しく論じた事がある [小馬徹「父系の逆説と、『女の知恵』としての私的領域」、和田正平 (編)『アフリカ女性の民族誌』、1996]。ただし、ロズィ、ズール、ヌエルなど「家財産制」が見られる社会に若妻の擬似子称があるかどうかは判らない。少なくともキブシギスにはそれがあ、しかも「家」同士の(理想とされる)地理的な隔たりは断然大きく、知られている限りでは、間違いなく世界で最大である。

「悪阻」現象と女性の地位

ところで、夫の家族における妻の構造的な地位と、彼女が経験する「悪阻」状の身体現象、より正確にはある種の物の偏食 (food-cravings) のあり方が密接に関連していると言えるだろう。

悪阻は単に生理現象であるばかりでなく、同時に文化現象でもある。日本では、妊婦は誰も酸っぱい物を欲しが。これと同じ事が、アジアやオセアニア各地で観察されているが、妊婦の反応はそれに限らない。例えば、スリランカのシンハリ人の妊婦は、米、カレー、水など日常の食物を拒否し、高価な物、祭礼の馳走、男性を象徴するバナナなどを望む [G. Obeyesekere, "Pregnancy Cravings

(*dula-duka*) in Relation to Social Structure and Personality in Sinhalese Village”, *American Anthropologist* 65, 1963]。

こうした例は、男性が支配する社会における女性の地位とあり方を映し出す象徴的な現象と考えられ、ジェンダーの多様なあり方を読み解くうえでの有力な鍵として広く比較研究されて来た。一つの解釈は、世代を超えて家族を永続させる担い手となる胎児を質にとって女性が行う、男性に対する反抗だという見方である。なるほど、こうした現象の特徴は性役割のなごしかの転倒を強いる側面がある。社会的な劣位者である女性が、この機に乗じて、社会的な優位者である男性に抵抗しているのだと見る事は可能であろう。

西南ケニアの3民族

それでは、ケニアの父系諸社会を例にした場合、妊婦の「悪阻」のあり方にどのような差異が見られるのだろうか。ここでは、私自身の現地調査を基に、西南ケニアのキプシギス人、テリック人（以上カレンジン語系）、ならびにティリキ人（バントゥ語系ルイア人の一支民族）を比較してみよう。

16世紀半ばから、ルイア人の小さな人間集団が次々とテリック人に吸収されてその文化を受け入れて複文化的な民族形成をみたのがティリキと呼ばれる人々である。彼らの間では、隣接のルイア人の支民族であるマラゴリ人と同様、妊婦は胎児の要求に影響されて特異な嗜好を現すとされている。灰汁や塩の偏食や「土食い」(geophagy)がよく見られるばかりでなく、「人糞食い」(scatophagy, coprophagy)さえも咎められない。咎めると胎児が死に、次いで、それを知った祖霊たちが家族に不幸をもたらして制裁を加えると言う。だから、高価な肉類を飽食するなど、妊婦が横暴な振る舞いをする事が多いが、夫はどんなに無理をしてもその要求に応えようとする。平素した事がない賃労働の口を求めて、

右往左往している夫を往々見たものだ。

キプシギスでは、妊婦は、胎児ではなく、出産時にその赤ん坊の体内に入ってその魂となるはずの祖霊の生前の食の嗜好通りの特徴的な「偏食」傾向を示すと言われる。妊婦は、牛乳や肉などの贅沢品を欲する場合が多い。男性の祖霊が赤ん坊に「再来」する事を予想・期待されている場合には、日頃は女性が食べる事を禁じられている獣肉の部位である顎部や睾丸を望んだり、飲んだ事もない蒸留酒をねだる事がある。叶えられないと、盗みに訴えさえる。だが通例、肉なら一片、酒なら一口で満足する。家族に横柄な振る舞いをした妊婦を見た事は、一度もなかった。

他方テリックでは、伝統的にはキプシギスと同じ再生観と祖霊の信仰を持ちながら、ルイア文化の影響か、妊婦の振る舞いはティリキに酷似している。彼らの場合の特徴は、ティリキやキプシギスとは異なり、妊婦とその夫の食や行為に様々な禁忌と制限が課されている点にある。妊婦の過食は難産の、「土食い」は便秘の原因になると戒められ、夫への横暴な言葉使いも非難を受け、制される。

三者それぞれの論理

ティリキでは、秩序（非妊婦）と反秩序（妊婦）の対照を極限化する事によって、それが一時的・例外的なものである事を明示し、秩序への復帰を滑らかにしている。キプシギスでは、妊婦を「祖先を産む者」と規定して夫の氏族への編入を強調する事によって、成員の再生産という女性に特権的な力を男性文化へ再統合する事を円滑にしている。

カレンジンでありながらルイアの影響を強く受けたテリックの場合、上のどちらの文化装置も中途半端にしか働いておらず、妊婦の行動を禁忌と規制によって直接的に制御する方途を選んだのだと考えられるだろう。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）